ティーチング・ポートフォリオ

長崎　靖子

（記入日：2019 年　9 月　21 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本語学(1)（日本文化学科前期選択必修科目　２単位)、日本語の歴史(1)（日本文化学科前期選択必修科目　2 単位)、文章表現法（日本文化学科前期選択必修科目　2 単位)、日本語教育演習（日本文化学科前期選択必修科目　2 単位）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

母国語である日本語を、国語教育並びに日本語教育の立場から捉えることができるよう、日本語の音声、文字、語彙、文法に関する基本的な知識を学び、国語語教育並びに日本語教育のを行うことが、日本語に対する関心を深めることに努めている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

例えば、文章表現法では、中学校、高等学校の授業にある「創作文を作る」「本を紹介する」などの単元を自らが実践することで、授業方法を学べるように心がけている。具体的にはグループごとに、リレー形式で創作文を作らせる、また本の紹介文としてポップ作り、ビブリオバトルを実践している。ポップは大学図書館にて展示する、またビブリオバトルはビデオ撮影を行うなどして、意識を高め、事前事後の学修をしておくよう促した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

文章表現法の「本の紹介をする」授業では、紹介文には個性的な内容が多く、事前にポップを作るために読書活動を行うという学修成果が確認できた（エビデンス１)。また、ビブリオバトルでは、ビデオ撮影があることで、学生の意欲が高まり、発表に対する積極的な姿勢を確認することができた（エビデンス２)。

「創作文を作る」授業は、３人一組を基本として行う予定であったが、人数がそろわず、教員も参加を行う形となった。この授業に関しては人数によりフレキシブルに対応する方法をさらに検討する必要があるという課題を残した（エビデンス３）

５　今後の目標（これからどうするか）

中学校、高等学校の単元にある授業科目をさらに加えるとともに、個々の授

業形態もバラエティに富んだものにしていきたいと考えている。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　課題ペーパー（非公開）

２　テキスト　半沢幹一他『ことば遊びの日本語表現』おうふう　2008

３　参考図書　中学校・高等学校国語教科書

ティーチング・ポートフォリオ

岩崎　利彦

（記入日：２０１９年０９月２３日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

スポーツ(２)

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

学生が、学生自身の身体に興味を持ち、生化学的根拠を理解し、知識を身につけるとともに、自身の身体で実践することで、継続的に QOL 向上に取り組む態度を身にけること。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

人生 100 年時代を理解し、健康的な身体を手に入れるためのトレーニング（身体づくり）方法を、科学的根拠を指標を提示しながら、学生個々にあった負荷で体力づくりが行えるようにした。

また、スポーツの文化的側面を、ランニングを通して理解してもらえるうよに、ランニングの楽しさ、爽快感を実践において経験できるようにした。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

文化的側面の理解においては、実践において「楽しさ」を知り、授業の回が進むほど、ランニングへの積極的な参加が増えた。

反面、「体力づくり」においては、科学的な根拠を示しても、自身の身体に負荷をかけることから、積極的にならない面が多く見られたが、科学的な理解は進んだと考えている。

５　今後の目標（これからどうするか）

「体力づくり」への積極的参加への工夫

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

配布資料　運動時の心拍数の変化（非公開）

クーパーテスト（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

田中　孝一

（記入日：令和元年９月２４日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

担当科目はすべて教職科目。(教育課程論」,「教職総合演習」,「教職実践演習」,「教育法規」,「教育行財政」,「国語科教育法」,「国語科教育法 Ⅰ，Ⅱ」)

いずれの科目においても，基本的は，学校教育の理念，現状，向かうべき方向等について，理論的な考え方の基礎を体系的に身に付けることを重視するとともに，教員として重要な実際的，実務的な知識や技能の獲得とその活用を効果的に行うことができるよう繰り返し指導を行っている。

例えば,「教育課程論」においては，国際的な学力調査の考え方や内容等が我が国の教育課程にどのような影響を与えているかを考察しつつ，一方で，明治以降の我が国の教育課程の変遷を踏まえることを通して，我が国の伝統的な学校教育，教育課程の理解の上に，これからの教育課程の在り方いついて考察している。

また,「国語科教育法」,「同Ⅰ，Ⅱ」においては，小学校，中学校，高等学校の国語科教育の実際の在り方いついて，まず理論的な整理を行って上で，次期学習指導要領全体の考え方，目標・内容等の示し方を構造的に理解した上で，国語科の理解を行って，指導計画の作成，それに基づく模擬授業を実施している。受講者数が少ないので，科目によって，一人 45 分，50 分のフル，ほかには 30 分，20 分の模擬授業を行っている。このように，一人当たりの模擬授業の時間が多いのは小規模な学生編制の特徴であるが，学生は，指導案，模擬授業の準備を長時間かけて行っている。全国的に見ても，これだけの時間を事前も含めてかけているのは珍しいことと思われる。

（以下，他の科目の取組の例は省略。）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

教職科目は，その全てが教員として必要な知識と技能を身に付けることを役割としている。更に言えば，そこで身に付けた知識や技能は実際の教育指導の場で具体的に生かされていくべきものであるから，授業自体は，理論的な理解を前提としつつも，きわめて実際的 actual 乃至は active であることが求められ

る。すなわち，学級担任や授業担当者として，1年間をどのように計画しどのように運営していくか，1週間の授業計画をどのように立案するか，1時間の教科等の授業をどのように進行していくか等，全ては具体，実際の世界で仕事をしていくことが常に求められている。したがって，教職科目の授業担当者としては，どの科目の授業であれ，その科目の特質や性格，目標等に応じて，このような能力を育成することを目指している。そのためには，知識や技能だけでなく，教員としてのモラールができるだけ高いレベルで維持されるよう，常に関心，意欲の喚起，達成感の涵養等に心がけている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

授業自体が常に実践的な知識や技能，能力の育成につながるべく，実際的，実務的な学習活動となるよう工夫している。具体的には，「国語科教育法」であれば，指導案の作成に当たっては，特に，その考え方，学習指導要領の活用の仕方，模擬授業の仕組み方等について指導に力を注いでいる。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

前期の結果からは，いずれの科目においても，学生の懸命の取組により，ねらいどおりの成果が挙がっている。特に，「国語科教育法」，「同Ⅰ」においては，学生にとっては，指導法に関する科目の初履修であり，初学者としては知識も技能もない，ゼロからのスタートであった。それにも関わらず。その成果はきわめて顕著であった。

このような学習は，広がりと継続が重要であるので，例えば，指導案は模擬授業が終了した時点で終わるのではなく，受講者同士での研究協議さらにはそれを受けてのコメントシートの作成，それを相互に交換してからの修正版の作成，提出，さらには，修正版を全てお互いに交換してのファイルの作成まで行った。

このように，全員の取組と最終的な成果の共有を確実に行い，以後の学習へ，の準備を整えたことにより，今後の必要に対しいつでも対応可能な状態を保つことになった。

５　今後の目標（これからどうするか）

基本的には現在までお取組を継続する。

特に，「国語科教育法」等においては，次期教育課程が小学校では来年度から全面実施されるので，それの理解をさらに深めていきあい。また，学校では児童生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成を図る必要が実際にあるので，学生自身の授業のアイディを更に生かした授業づくりを進めたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

(1)「授業の記録」　毎授業時間記載するもので､その内容は授業の実施内容，質問等への回答，理解不足，誤解等の修正等を行った上で，その全てにコメント等を付け，次回授業までに学生に返却することにより，学生との不断のコミュニケーションを図り，授業内容等の理解の定着を図っている。

(2)「授業の記録」の他，授業の事前学修，事後学修，授業中の作業，協議等に関わる諸資料の蓄積の全てをファイルにまとめ，適宜授業中に活用することに加え､期末には，学習課題の一つとして提出をさせて，そのまとめかた等をチェックして，成績評価の１段階としている。最終的には学生に返却している。なお，当該ファイルは，今後の他の科目の授業や後の必要に応じて活用するよう指導している。〔学習活動の全ての課程と結果をポートフォリオとして整理，活用。

ティーチング・ポートフォリオ

眞田 尊光

（記入日：2019 年 9 月 20 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎ゼミナール（１年必修科目 2 単位)、日本文化入門（２）（１年必修科目 2 単位)、プレゼミナール（２年必修科目２単位)、日本の美術（１）・（２）（１年～４年選択必修科目２単位)、日本の絵画（２年～４年選択必修科目２単位）日本の仏像（２年～４年選択必修科目２単位)、文化財の保護と修復（１）・（２）（２年～４年選択必修科目２単位)、日本文化専門演習Ｖ（１）・（２）（３年選択必修科目２単位)、文献演習（１）・（２）（４年必修科目２単位)、日本美術史（２年～４年選択科目２単位）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

学生が日本の美術・文化財の特徴や歴史を学ぶことを通じて、芸術がもつ魅力やその価値を理解するとともに、文化の多様性を把握することで、他者を尊重し主体的に社会貢献できる能力を身につけることである。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

日本美術関連の科目では、学生が美術作品や文化財について詳しく観察してより理解しやすくするために、デジタル画像・動画の使用だけでなく、絵画・彫刻・工芸品の実物作品や複製品も出来る限り活用して解説している。また、実物を観察する機会として博物館・美術館・寺社での見学授業も設けている。さらに、日本美術の基礎を学ぶ科目では、日本の伝統的な意匠を深く理解するため、工芸製品のデザイン案を提出させ、外部業者の協力を得て製品化するというアクティブラーニングを試みている。文化財関連の科目では、地域における文化財の保護の実態を知るために現地でのフィールドワークを行うとともに、有形文化財の取り扱い方について実物資料を用いて実践的な指導を行っている。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

現地見学で学んだ成果はレポートにおける具体的な内容から確認できた（エビデンス１)。日本の美術（2）（2018 年度）と日本の美術（1）（2019 年度）で学

生のデザインによる缶バッジと団扇をそれぞれ作成した（エビデンス２）。2018年度の卒業生が現在地域博物館において解説ボランティアとして活動を行っている（エビデンス３）。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生が授業時間外に美術品や文化財に接する機会として展覧会や公開情報を積極的に紹介し、その機会が事前事後学修として結び付くようにする。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　学生提出レポート（非公開）

２　日本文化学科　缶バッジ・団扇（日本文化学科学生研究室にて配布中）

３　個人情報のため非公開

ティーチング・ポートフォリオ

伊藤 純

（記入日：2019 年 9 月 23 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本文化学科専門科目では「日本文化入門（１）」「日本の伝統芸能（１）（２）」「日本の民話・神話（１）（２）」「日本の宗教と思想（１）（２）」「日本の祭りと儀礼」「日本風俗史」「日本文化専門演習Ⅵ（１）（２）」「文献演習（１）（２）」、共通教育科目では「民俗学」を担当している。大学院では「文化人類学特論Ⅰ・Ⅱ」を担当している。

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

学生の関心や問題意識を尊重しながら、学生自ら課題を設定し、課題に対する適切な方法論を用いることができる人材を育成することが教育目標である。特に文化を取り扱う領域のため、学生が民俗学・文化人類学の知識、方法、視座を学ぶことにより、自文化および異文化、さらに自己および他者に対する理解を深めることを目指している。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「日本文化入門（１）」をはじめとする講義科目では、写真や動画を使ったスライドを積極的に利用し、初学者でも授業内容を理解できるように工夫した。フォローアップとしてリアクションペーパーを配布し、質問があったときは、次週で回答した。「日本の伝統芸能」では、WEB で閲覧できる専門的な情報（「国指定文化財等データベース」「e 国宝」などの専門的なページや関連する動画、クラウド上の資料など）に授業時間外でもアクセスしやすいよう QR コードを利用した。演習科目では、図書館のグループ学習室を利用したライブラリワークや巡見や現地調査などフィールドワークを取り入れて、学生自ら必要な資料や文献を収集できるように指導した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

「日本文化入門（１）」では、読解が難しい用語やテキスト内の不十分な説明に対しても、写真や動画などを補助的に使用した結果、自らの経験に引きつけて理解していることが確認できた（エビデンス１）。「日本の伝統芸能」では動

画閲覧により、伝統芸能への関心が高まった（エビデンス１）。日本文化専門演習（１）（２）においては、学生自ら発表に必要な文献や資料の収集ができるようになり、学生相互で討議ができるようになった（エビデンス２）。

５　今後の目標（これからどうするか）

事前・事後学習を促すために、基礎文献のリストを事前に配布し、読解のためのアドバイスを行う。また、学修の成果をみるレポートの機会を増やす。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１ リアクションペーパー（非公開）、レポート（非公開、評価後に学生へ返却）

２ 授業配布物

「テーマの設定、文献、資料収集の方法」「図書館の有効利用」など

（非公開、office365

https://kgwuacjp-my.sharepoint.com/personal/j_itou_kgwu_ac_jp/_layouts/15/onedrive.aspx）

ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科　千野裕子

（記入日：令和元年 9 月 23 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

古典文学概論（選択必修科目 1～2 年前期）、古典文学講義（選択必修科目 1～2 年後期）、日本文学史（古典）（選択必修科目 1～2 年前期）、日本文学と女性（古典）（選択必修科目 2～3 年後期）、日本文化専門演習Ⅱ（古典文学）（選択必修科目 3 年前後期）、文献演習（必修科目 4 年前後期）、文学（共通教育科目 1～2 年前期）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

学生が日本古典文学に関する知識と理解を深め、自らの力で作品の解釈を行うことができるようになることにより、自身とは異なる価値観を認め理解するための深い思考力を身につけること。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

古典文学概論・古典文学講義・日本文学と女性は、毎回のリアクションペーパーで作品内容に関する受講生の解釈を書かせるようにし、それに対して丁寧にフィードバックを行った。

日本文化専門演習と文献演習では、作品理解を深めるための議論を重視し、それを行いやすくするために、連絡の補助手段としてスマートフォンの通信アプリを利用し、授業外でも学生が積極的に質問や意見を伝えられるようにした。

資料収集能力を身につけるため、日本文化専門演習ではパソコンやスマートフォンを実際に利用させ、各種データベースの検索方法を指導した。また、文献演習では国文学研究資料館（東京都立川市）で学外授業を行い、資料収集の実践を試みた。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

古典文学概論・古典文学講義・日本文学と女性では、回を追うごとに多角的な作品の見方をするような受講生が増えた（エビデンス２）。

日本文化専門演習の受講生は自らの力で先行研究をはじめとする資料を収集することができるようになっているが（エビデンス１）、収集後の整理などに関しては個人差があり、指導が十分に行き届いたとはいえなかった。

５　今後の目標（これからどうするか）

演習科目だけでなく講義科目でもレポート課題等に向けて資料収集および整理の力を身につけさせたい。そのため、授業内でデータベース利用などの資料収集の実践を試みる機会を増やす。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１．授業のレジュメ（非公開）

２．リアクションペーパー（非公開）